

196 1889年パリ万国博覧会と日本（2023年9月21日）

前回、セーヌ川沿いのブキニストで見つけた約 100 年前の新聞に掲載されていた日本に関する記事を取り上げました。ブキニストには、1889年に開催されたパリ万国博覧会の週刊誌もありました（写真右）。日本は、1867年の第二回パリ万国博覧会に初めて参加し、美術や工芸品を出品して日本に対する関心を高めました。その後、フランスではジャポニスムブームが起きましたので、1889年の第四回パリ万博では、日本が行う展示に対する期待や関心があったと考えられます。この週刊誌では、日本についてどのような情報が伝えられたか、関心を持って読んでみました。



1889年のパリ万博は、5月5日から10月31日まで開催されました。1889年7月20日付けの第21号では、3枚の盆栽の版画とともに1ページ半にわたって盆栽について説明しています。トロカデロ広場に日本庭園が設けられ、日本から来た庭師の畑和助が活躍したことを以前にご紹介しました。この週刊誌の記事には、畑和助の名前は出てきませんが、畑が手入れをしたと考えられる盆栽を見たフランス人の評価が述べられています。記事の筆者は、盆栽は40から60センチに刈り込まれて小さいものの、70年も90年も経過していることに驚きを示しています。また、近づいてみると老いた木であることが分かるものの、雨嵐との戦いに勝利して生き抜いてきた力強さもあると述べています。そして、小さくかつ均整の取れた形を維持するといった具体的な手入れの方法も説明しています。そして、100年、150年と盆栽を育てるためには、親から子へ、子から孫へと代々継承していく必要があり、盆栽は忍耐がなせるものだと述べています。筆者は、実際に盆栽の展示を見ることができない読者のために、展示されている盆栽の大きさ、木の種類や樹齢を解説しています。記事とともに、展示作品の中から選ばれた3つの盆栽の版画が掲載されています。右の写真はそのう



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

ちの1枚で、樹齢150年の松の盆栽です。最後に筆者は、「小さく、デフォルメされ、奇妙なものを好むことは何ら驚くことではなく、そのような傾向はすでに日本の建築や美術にも表れている、日本人は大きく巨大なものを理解することも探し求めることもせず、何でも小さくして、自然までも自らの手におさめている。」と述べています。今ではフランス人にも人気の高い盆栽ですが、盆栽に見慣れていない19世紀末のフランス人筆者による観察は、日本とフランスの美意識の違いを理解するものとして、とても興味深いものです。

1890年1月15日付けの第70号では、版画とともに日本の展示会場について説明した記事が、展示会場の内部の様子を描いた版画とともに掲載されています。記事では、日本の展示会場の設計を依頼されたフランス人建築家の苦労話を書かれています。建築家は、「できる限りの資料を集め、神経をすり減らすほどの試行錯誤、うんざりするほどの研究と果てしない調査の後に、フランス語を5つしか知らない日本代表団の委員たちに下絵を見せたら、彼らは笑いながら頭を振って分からせるような態度で、そうではないと述べ、全て最初からやり直さなければならなかった。」と書いています。そして、筆者は、建物の外観も内装もいかに良くできているのかと、建築家を擁護する論調で続けています。本格的な交流が始まってまもなく、お互いの文化を知るための情報が少なかった時代で、日本人とフランス人のコミュニケーションの難しさを伝えるエピソードです。

